

Title	<批評・紹介>渡邊信一郎著 中國古代社會論
Author(s)	太田, 幸男
Citation	東洋史研究 (1987), 46(3): 626-634
Issue Date	1987-12-31
URL	<a href="http://dx.doi.org/10.14989/154210">http://dx.doi.org/10.14989/154210</a>
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

## 批評・紹介

渡邊信一郎著

## 中國古代社會論

太田 幸男

(一)

本書は、先秦時代から唐宋初期までを対象とした中國社會、特に農村社會の構造とその變遷を、主に農業技術の發展を軸にして描き出したものである。本書は、著者を含む若い中國史研究者のグループである「中國史研究會」(その會の研究成果の第一弾はすでに『中國史像の再構成——國家と農民——』(文理閣刊)として世に問われている)における中國史全體の共同認識の上に立ち、前述の時代について著者の責任においてまとめられたものと考えられる。また、小經營生産様式論によって示される著者の理論的骨格は、中村哲『奴隸制・農奴制の理論』(東大出版會刊)の影響の下に、中國史のもつ特殊性が具體的に検討されながら形成されたものと推測される(このことは本書の「あとがき」からもうかがえることである)。

本書のもとになった諸論文は「あとがき」に列挙されているが、これらには大幅に手加えられ、結論も大きく變っているものもあるし、新稿も當然含まれている。しかし、著者の基本的な主張點は

ここ十數年變つていとは思われない。私は著者の、本書のもとになった諸論文に對しては幾度か私見を公表して來ており、本書に接してもこの私の見解を基本的に變更する必要を認めない。したがって、この書評においては、紙幅の都合もあって、既述した私の見解は極力くり返さないで、新たな私の見解や疑問點の部分を中心にして述べる。

本書は、「第一部 分田農民論」、「第二部 富豪層論」、「第三部 中國古代農村の社會構成」の三部に「緒論」が冒頭に加わって構成されている。本書評は、これらのうち第一部に特に重點を置いて述べたい。それは、私自身の専門分野と直接かわるのがこの部分であることにもよるが、著者自身にとっても、中國史研究會にとっても、中國史上において小農民經營がいつ、いかにして形成されてくるか、を論じた部分に決定的な重要性があると考ええるからである。

〔註〕特に本書評に直接かわるものとして、①「中國古代國家成立に關するノート」(『歴史評論』三五七)、②「中國古代史研究の課題と方法に關する覺書」(『東京學藝大學紀要・第三部門』第三七集)をあげておく。以下の論でこれらの拙稿を参照する時は、この番號のみを示す。

(二)

本書の第一部では、「分田農民」と著者が概括するところの、古代中國の大多數の農民による小經營の形成過程が論じられており、時代的にほぼ春秋末期より漢末までが対象とされているが、ポイントとなる時期は商鞅變法の行なわれた前四世紀中期の前後二、三百

年であらう。

「第一章 古代中國における小農民經營の形成」においては、小農民經營の形成過程を労働過程の變化を軸にして概括している。まず第一に、湖北省江陵縣鳳凰山漢墓出土木簡にみえる鄭里廩簿や遣策を主な分析対象にとり上げて、秦漢時代の農民には大家・中家・貧家の三階層があり、後二者が各々全體のほぼ半数近くを占め、大家は極めて少数であった、とする。そして、これら中家・貧家が、國家の租税対象となる經營の基本單位（小農民家族）であった、とする（第二節）。次に、これら小農民家族という經濟單位の形成過程を、春秋・戰國期における農業労働過程の變化の中に見出そうとする。すなわち、鐵製農具の出現・普及を境にして、季冬に行なわれる、休閒地の作付のための舊年の雜草・陳根拔除作業たる「除田」をとものなう切替畑式農法から、晩冬・初春に行なう「發」作業にひき續いて耕種が行なわれる年一作方式に變化したとする。この變化は、鐵器によって雜草・陳根の處理が容易になったことに起因するが、さらに、耕起深度の増大にともなう施肥・保澤效果の増大もともない、地力維持方式の端緒的成立もみられるようになった、とする。しかし、農業労働の組織形態は、この生産力發展によつては變らず、一貫して耦耕という二人一組による労働であつた。變つたのは、切替畑式農法の時代は、耦が個人や個々の家族・世帯を越える共同團體によつて編成されたのに對し、年一作方式時代に入ると（少くとも漢代では）それが個別家族内で編成されるとし、「街彈の室」の制度は、特殊な耦の編成を里を單位に行う、共同團體主導時代の遺制である、とする（第二節）。次に、このような社會的變化を國家による土地政策として實現させたのが商鞅の變法であるとする

が、その前提として、從來議論の多い幟田制を論じ、これが土地割替という共同規制下に置かれた耕地制度で、年一作方式が完全に普及する前の移行過程にみられるものであるとする。そして、商鞅の「開阡陌」を述べた『漢書』地理志と食貨志の記事を比較し、前者にみえる「制幟田」と後者の「壞井田」を同一内容のものと見、商鞅によつて幟田が壞廢されて阡陌制下の個別小家族による世襲的土地占有が具體化されたとする（第三節）。最後に、エンゲルスの『起源』に示されるシェーマと、著者の示した中國古代社會の移相との比較を行ない、古典古代と異なる中國古代社會の特質を指摘する。

本章では、著者の小農民經營成立論のアウトラインが描かれており、本質的な論議もこの章に集中してよいと思われる。第一節は、漢代社會がフラットな無層社會であるとする説に對する批判であり、階層差をはつきり看取できるとする主張には、社會の實態としては私も一定程度首肯するものである。しかし、その實態を基礎にした國家支配があると認識するのか、國家支配の上での矛盾として存在すると認識するのか、については本質的な相違があると思われる。著者は前者の立場であり、「漢代社會においては、明らかに個々の家が社會の基本的經濟單位、國家編成の單位（編戶）となつており」（二七頁、傍點太田）と云われるが、著者の引用する『鹽鐵論』未通篇、「漢書」兒寬傳、租税免除に關する『漢書』高祖紀の記事は、私にはそれを示す史料とは讀みとれず、むしろ逆に後者の立場で讀むこともできると思われる。また、鄭里廩簿にみえる種料貸與（二二頁表一）は、貧家層への國家からの貸與ではなく、別の目的をもつた國家政策（例えば日本古代の公出舉のごときもの）とも考えることができるし、里内における種料の共同管理・配分を示した

ものとも考えられよう。拙稿②において、生産物の國家的收奪たる田租が、戸を單位として徴収するのを原則とすることを示す史料を見ないと述べたが、個別人身に課せられる賦・徭役ともあわせて、漢代社會の現實と國家支配の原則との關係をあらためて検討しなくてはならないだろう。第二節に關しては、私も大筋においては著者と同様の理解をしてきたものであり、先秦期における農業勞働過程變遷の新しい角度からの實證から多くのことを學ぶことができた。ただ史料の上で若干不安が残るのは、除田作業が寒期に行なわれたことを示すのは『國語』韋昭注のみであること、勞働過程を大きく變えるほどまでに春秋・戰國期に鐵製農具が普及したと斷言するには、より考古學的研究が進展する必要があるのではないか（特に五井直弘「鐵器牛耕考」〈三上次男博士喜壽記念論文集・歴史編〉参照。なお渡邊氏は鐵器と牛耕の普及時期を別にして考えており、後者は漢代中期と想定されているようであるが、雲夢秦簡の記事には牛の盜難・賣買がかなり見られることも合せて、より深い検討が必要であろう。要は「普及」とはどの程度までを云うのか、であらう）ということ、および表一にある「移・越人戸」の語から耦耕編成のための人爲的操作を想定するのは、他に能田者が奇數である戸が多く見られることから、やや強引な結論ではないか、ということである。第三節の轅田の理解については、私と著者とはほぼ同様でありながら、「制轅田」という商鞅の變法内容については全く逆の結論となった（拙稿「轅田攷」参照）。この相違點についてくわしくは拙稿①に述べた。商鞅の變法については、それが秦の國家・社會體制の全面的變革にかかわるものであり、「開阡陌」という土地政策はその一環として位置づけられるべきものであるので、變法の

内容全體の分析を抜きにして、その歴史的意義を所謂通説に依つて小農民・耕戰の士の創立であると結論づけることには、私は従い難い。

エンゲルスの『起源』にみえるシェーマと中國古代社會の現實との相違についての私見は拙稿①に示した。ここでつけ加えて述べておきたいことは、勞働組織・經營形態・所有形態の關係である。著者がエンゲルスの云う共同勞働の意味を、大規模な協業による勞働に限定せず、「勞働の組織が共同の計算に基づいて編成される」（六一頁）ものをも含んで解し、この段階を共同所有の段階としたことは異議がない。ここでは經營形態を問題とする以前である。次に著者は、エンゲルスのシェーマにはない共同所有・個別利益の段階として土地割替の行なわれた轅田制時代をとらえる。ここでは、勞働組織は基本的には固定されているが、共同の計算によつて耕地の割替が行なわれるのであるから、一種の共同經營であると云えるのであり、この段階を著者は移行期とするが、共同所有の段階に含まれることは疑いなかろう。問題は次の段階であり、土地割替が行なわれず個別小農民經營が形成され、小農民の世襲的土地占有・上級土地所有權の段階に入ると著者は云う（私有が確立しない所に古典古代との相違を認める）。この段階では、著者はもはや共同體の機能を基本的には認めず（遺制としては若干認めるが）、代つて國家權力による土地の授與權等を認めるのである。しかし、勞働組織や耕地配分權がなくなった段階で共同體の基本的役割は失われ、個別小農民經營が形成されたと云えるのであろうか。それまでの共同體の機能として考えられる農具・家畜等勞働手段の管理・配分、井戸・溝洫等の管理運営、生産物の貯藏・配分（種料も含む）はす

べて上級機關＝國家權力の末端機構の手に移ってしまったと云えるであろうか。私は、土地割替制の廢止は共同體機能の喪失＝個別經營形成への一重要段階ではあつてもその完成ではなく、段階としては依然として共同所有にとどまると認識しており、にもかかわらず上級所有權者として成立してくる國家とはどのような性格のものであるか、を古典古代と對比して考察することが必要であると考えている。ここに著者との基本的相違がある。

「第二章 阡陌制論」は、青川縣出土田律の分析を中心に、阡陌によって區割される土地はどのようなもので、どのような歴史的意義があるかを論ずる。

まず、臨沂縣銀雀山漢墓出土竹簡中の『孫子』吳問篇及び『戰國策』趙策一にみえる記載から、二百四十歩一畝制と阡陌制が前五世紀半ば頃の趙國においてすでに施行され、それが秦國に導入されたものと推定する。次に多くの解釋と論議がある青川出土田律の内容を検討し、著者がすでに發表した本誌四三―四號の論文の結論を訂正した上で次のように阡陌制の内容をとらえる。

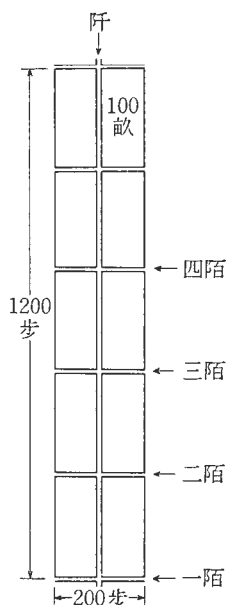
「阡陌制は、一步×二四〇歩の畝を最小構成單位とする地割である。陌は、一〇〇歩×二四〇歩の構成をなす一〇〇畝＝一頃土地を區劃し統轄する道路であり、阡は、この陌を左右に五陌ずつ計十陌分、すなわち千畝（二百歩×二二〇〇歩）の土地を區劃し統轄する道路であつた。阡陌によって區劃された耕地は、編號をもつて登録される陌ごとに亭部によって統一的に管理され、什伍制的編成をもつて國家の軍事領域の最末端を構成した。陌を通じて把握される一頃＝二二〇〇畝の耕地は、阡陌制成立期にあつては小農民家族の『名有』＝世襲的占有を認められた土地であり、通常はその姓氏を

冠して呼ばれた。總じて、第一章でとりだされた個別小農民經營の實現する世襲的土地占有を什伍制的編成を通じて國家の下に把握するのが阡陌制なのである（本章「おわりに」、九五頁）。」

次に、この阡陌制は、第一章でみた社會の半ば近くを占める中家層の没落と、社會の二層への分解によって崩壊するとする。そしてこの變化は、犁耕を基軸とし頃單位の農地を經營する大農法的農業の出現・擴大によつておこるとし、武帝末年の趙過の代田法が、牛犁耕によつて五頃を單位とする經營を述べているのは、まさに阡陌制崩壊の基礎を準備したものである、とする。

まず、阡陌制の、趙國においての施行に關する史料の「發見」と商鞅變法との關連づけに關しては貴重な成果であると思われる。特に二四〇歩一畝制が代田法施行時でなく戰國期であることは、これによつてほぼ確定されたとも云えよう。また、阡陌制に關して商鞅以前にも何らかの先行制度があつたことは當然考えられることであり、商鞅變法を秦國のみでなく、戰國期華北の土地制度全體の中で考える必要性を指摘したことは重要であると思われる。問題はその内容にある。著者の史料の解釋の仕方に対する私の主な疑問點を列挙すると以下のごとくである。

(1) 最大の問題點は阡・陌による區劃の仕方の想定である。著者の阡陌概念圖は次頁のごとくである（七八頁）。もとになる田律の文は「一百道百畝爲頃一千道道廣三步」であり、著者は「百」「千」の下に「畝」字を補つて「二百〔畝〕ごとに道あり。百畝を頃と爲す。一千〔畝〕ごとに道あり。道の廣さ三步なり。」と讀む（六九―七〇頁）。そして前者の「道」が陌であり、後者の「道」が阡であるとすると、こう考えると、阡の方はたしかに左右に五百畝づつ計



千畝の土地を區劃する道であると解せるが、この論理でゆくと陌は南北に二百畝づつ計四百畝を區劃する道と云うことになり、前掲の著者の説明とは矛盾する。田律の文を、百畝・千畝を區劃する直交する道路である阡・陌の説明であるように讀むのは無理なのではないか。田律の文には、道路の名稱としての「阡・陌」は出てこないのであるから、「畝」字の補が正しいとするならば、ここはただ百畝・千畝を區劃する道がある、というだけの説明ではないか。さらに附言するなら、「道の廣さ三步なり」は千畝を區劃する道だけにかかると解すべきではないか。

(2) 著者は阡陌制とのかかわりでは、一戸の耕地百畝の割あてを前提としすぎてはいないだろうか。著者自身、一家二人・年一作方式で耕作できる面積は四・五〇畝と云う（七六頁）。漢代でも一戸平均六八畝という計算をしている（註(23)）。耕地の割あてで増産をはかり、中家層育成を目的としたと云うが、商鞅變法とは、より效率的な、より現実的な政策であったと私は考えている。

(3) 著者は阡陌による區劃法を、什伍制という軍隊編成制と一體のものとしてとらえる。しかし、軍隊組織は徵兵制とのかかわりで、居住組織と関連させてとらえる必要はあろうが、耕地区分とは直接

かかわらないのではないか。著者は、什伍制を念頭に置いたがために、耕地區劃法にも無理な想定を強いられたのではないかと思われる。

(4) 後漢時代後期の賣地券に、佰（陌）の上に姓氏を附した表現があることの指摘は貴重である。しかし、私の判断では、この時期こそ個別經營が十分確立し得ていたが故に、陌道に沿った耕地を、この時期になってこのように表現したように思われる。商鞅の時代から陌を基準に戸毎に耕地を割あてた證據とするには、やや時代が離れすぎ、その間の制度・慣習の變遷を考慮に入れない結論ではないだろうか。

(5) この賣地券に、耕地の所在を示す語として亭がでてくる。著者の指摘のごとく、このことはすでに日比野丈夫氏が述べているが、著者はさらに發展させて、耕地が陌ごとに亭部によって管理されているという。亭に關して、このことを示す史料が欲しい（飯尾秀幸「亭考」、昭和六一年度史學會大會報告、『史學雜誌』九五—一二號参照）。

(6) 阡陌に關しては、ほぼ同時期、同國內の竹簡史料たる雲夢秦簡にも記載が見える。特に法律答問四三四簡の阡陌に關する答問は重視すべきと考えるが、著者は「封」についての史料にしか使っていない。句讀法にも疑問がある。これに子細な検討を加えるならば（さらに畔・埒・畛の實體をも検討するならば）異った結論も可能ではないかと思われる。

青川田律に關しては、私自身もその解釋をまだ出せずにいる。著者の見解に觸發されて、この竹簡の記事の表・裏面の文言全體を、とらえるか、自説を提出する義務を一層強く感じている。

阡陌制崩壞についての著者の考え方は、阡陌制の前述のとらえ方の歸結として、また第二篇での實證内容への連續として當然の論理であらう。墾耕法の「普及」を何時に求めるかという、前述の問題は残るが、代田法が大農法經營の先驅であることは首肯できよう。著者は小農經營の確立→中家層の没落→大農經營の成立というシームで漢代社會をとらえているが、實證ぬきの私の今のところの見通しを敢えて述べれば、共同體的規制の弛緩が、一方で小經營の成立から確立への方向を生み、一方で大農法經營を生んだのであり、兩者が同時並行的に、ゆるやかに、地域差をとまないながら進行したのが漢代社會ではなかったかと考えている。

「第三章 分田農民論」では春秋戰國期より唐代に至るまで、小農民經營の行なわれる場を示す語として「分田」があったとし、それは一つの觀念として、具體的にその意味するものの變化をとまないながらもこの時期に一貫して存在したことを實證する。

まず、『漢書』食貨志上・同王莽傳中に記載のある、王莽の詔令の中にみえる「分田劫假」という文句について、從來の諸見解を検討した上で、「分田より假を劫す」と訓んで、本來國家との收取關係にある私田—小農民經營から、豪民が假税という名目で農民的剩餘の一部を横奪すること（一〇五頁）という独自の解釋を提出する。そして、官田に對比されるもの、すなわち民田・私田としての分田という概念が、先秦より隋唐に至るまでの諸史料にどのような表現されるかを克明に検討してゆく。著者によるとそれは、孟子の井田説に淵源し、唐代の口分田・職分田にいたるまで、國家という上級所有權者の下で、明確な經界に基礎づけられた小農民の占有地であり、それ故に國家に對して一定の貢租・貢賦・軍役義務が賦課

されたものであるという。そして、戰國期の「百畝の分」から北魏均田制の「一人の分」へ、さらに唐代均田制の「口分」へとその觀念は變化をあとづけることができる、とする。さらに、唐宋變革期を境にして、分田の觀念は、國家に對して相對的により自立性をもつ永業の觀念に轉化してゆく、と見通している。

本論は、普遍的存在たる小農民經營を中國古代の人はどのようにに觀念し、用語の上に表わしたか、を長い時期にわたって検討した力作である。この論に對する私の基本的見解はすでに拙稿②において示した。分田という語を中國古代史の史料中から發見し、著者の小農經營論を思想史の側から補強した構想力には敬意を表するし、私自身も多く學ぶ所があった。しかし私なりの判斷では、先秦時代にみえる分田は共同體內の耕作分擔のための區分を觀念する語であり、集權國家成立後は共同體的機能を集約した國家の側から農民にいかにか均等に土地區分して農民間の階層分化を抑止するかという觀點から援用された語ではないだろうか。後者の場合、實態としての「分田農民」は相對的により自立した經營を行う存在であったとは思われるが、共同體觀念が國家規模に擴大されて小農民的耕作地を呼稱する語として使われるという點に連續性をもつのではないかと考えられる。

史料解釋の上でもいくつかの疑問がある。王莽の詔令中にある「分田劫假」が著者のように解せられるのであれば、「劫假」を云うことに力點があるのであるから、著者自身も云うようにやはり「劫假於分田」と表現するはずであり、あえて「分田」を強調して前に置く必要性はないのではないか。

著者が先秦における小農民經營の形成や實態を最も端的に示して

いるとする『史記』商君列傳中の商鞅變法の記載、『漢書』食貨志上の李悝の「地力を盡すの教」の記載中には、その基本的觀念を示す語たる「分」「分田」が現われないのは少し氣になる。

唐代の「口分田」「職分田」が「口ごとの分田」「職ごとの分田」と解せるかどうかには、さらなる検討が必要であろう。

### (三)

第二部では二世紀から九世紀までの農村社會構造の變化を徹底的に追求している。著者によるとこの時期の農村は壓倒的多數を占める貧家層と、一部の富豪層の二大階層によって構成されるとするが、従来、研究者によってこの後者の存在が様々に認識され、規定されてきた。著者は「富豪層」という新しい歴史的階層規定を設定し、それによる大土地所有とその經營の實態を、貧家層との相互關連(勞働力編成、協業形態)に着目しながら論述する。

「第四章 二世紀から七世紀に至る大土地所有と經營」では主に魏晉南北朝期を、「第五章 富豪層論」では主に唐代をあつかっている。富豪層の大土地所有は一圓的所有と散在制との統一として存在し、直營地と小作地に分けられる。直營地の經營は家族と賤人を含む非家族からなる家父長制的世帯共同體の成員、および傭作者の勞働によっておこなわれ、五・六人の勞働者による小規模協業を複數集合させて營まれた。これは、家父長制的奴隸經營と規定でき、六朝期に最高段階に達した。一方小作地は貧家小經營によるが、富豪の直營地を前提としてその延長線上に成立つ非自立的なものであった。ただ江南水稻作においては小規模な安定した技術構成が成り立ち、農奴制への可能性をはらんでいた。

これら富豪層は唐代に入ると農業のみでなく工商の經營をも行つて富を蓄積し、族的結合の中心であるとともに鄉村社會に威勢を振い、官人層とも結託したが、一方では國家の彈壓の對象ともなった。同時に國家の租稅・差役賦課・土地兼併、高利貸を通じて富豪層は貧家層と對立するようになり、その進展は社會的分裂狀態にまで達した。

また、富豪層の直營地經營(奴隸制經營)にも變化が生じ、新たに傭作を主とする經營、耕夫を主力勞働者とする經營、莊客を主力勞働者とする經營等が生まれ、これらが複合して直營地經營は解體に向う。小作地部分にも、浮客、客戸による事實上耕地を私有した經營が生じる。

一〇世紀以後、富豪は、豪富形勢へと形態變化するが、ここでは直營地經營は解體し、家を構成し・勞働力再生産と蓄積の基盤を確立した勞働者による小作地小經營が形成される。社會階層も、中戸・中産層の顯在化とともに三階層構成へと變化する。

以上のような論理の展開は豊富に引用された史料に肉づけされて、ダイナミックに論述されており、基本的に私の口を挟む餘地はない。二點だけ感ずる問題點のみを指摘する。

第一は家父長制的世帯共同體についてである。エンゲルスの『起源』においては、この概念は、原始共同體が分解して家父長制小家族が出現する間の過渡の段階で出てくるものである。この語をより廣い概念で用いることが不當であるとは思わないが、何故、この段階で複數の單婚ないし個別家族が一つに結合した二次的な形成があり得たのかを、單婚小家族の形成過程の延長上に位置づけて論ぜらるる必要があろう。社會史の重要な部分としての家族史が系統的に



論ぜられるべきであらう。

第二に、著者によると、六朝期江南の稻作技術は、火耕水耨によって代表される一年休閑の原始的なものではなく、陂・塘等の水利施設、牛犁耕を基礎とする直播年一作方式段階であり、華北に匹敵するものである。この説は近年盛んな東アジア古代の稻作技術論の中にあって、興味深い、議論を呼ぶべきものと思われるが、いずれが當時の江南において普遍性をもつものかは、今後簡單には決着のつかない、研究方法にもかかわる重要問題であらう。又、高い技術水準が、どのような經營を生み出したのかは、史料的には押えにくいと思われるが、華北と同じ基準では考えられない問題——水稻耕作獨自の労働過程を考慮に入れないという問題をはらんでいよう。

第三部は「第六章 唐宋變革期における農業構造の發展と下級官人層——白居易の慙愧——」からなり、唐末の詩人にして官人たる白居易の詩作に見える新興自立小農民に對する慙愧の念（これは結局は六朝の士大夫の最後の自己革新の挫折の結果であると著者は考える）を社會史的觀點から分析し、白居易の生涯と、唐末社會の變化を合せて検討した斬新な雄篇である。「唐宋變革」とは、農耕方式の上での①秋耕の發展による冬期の作物の作付の實現、②踏犁の進化（犁サキの銳利化、把手の裝備による反轉の容易化、足かけの装着による耕深の増大、器體の長大化）という進歩があり、これを基礎に小規模大農法による中戸・中産層の形成、小農法的農業の擴い手たる貧家層・佃客・佃僕の自立がみられ、農民的土地所有が實現されつつある、ということである。

これらの變化への富豪層の對應として、二つの道があるとし、收

取を實現していた國家的土地所有・國家權力と、土地所有を實現させつつあった中産・貧家層との雙方に對して政治的・經濟的鬭争を展開する道と、國家權力と結びついて特權階層となる道であるとす。これが日本と中國の富豪層の歩んだ道の相違であると見通すのであるが、このあたりは日本古代史家との間に十分な交流・討論・共同研究の必要な所であらう。

文學作品を通して社會の變化を見、返ってまた文學者の心情を把握するというような手法に感嘆した一篇である。

#### 四

「緒論」は主として從來の中國古代社會論に關する研究動向の整理と批判であり、恥かしながら私自身もその中に分類されているが、この整理の仕方は、今まで見て來た著者の論旨から見れば當然の内容となっており、敢て論評をしないでいきたい。

以上、私の理解にもとづく本書の論旨の紹介と、敢て批判點を前面に出した論評をおこなった。私自身、社會史論はもとより、政治史論も經濟史論も、著者のような體系のものをし得ていない現状において、本書評が單にケチをつけただけなのではないかという「慙愧」の念を持っていたためであらうか、隨所に實證なしの私の見通しまで迂闊にも吐露してしまつた。

近年、中國古代史を體系的にとらえようという大膽な試みが他に見られない中において、共同研究の一環としてのこのような書が出されたことは學界の大きな收穫であることは言を俟たない。本書に對する批判も、これからの繼承も今後大いに興ってくるであらうし、新たな論争も當然豫想される。これこそが本書の學界に對する

最大の貢獻であり、成果である。

そこで、今後の議論の活發化のために最後に一言。著者自身が本書でも述べるように、中國古代の農村社會は、古典古代等と比べてもはるかに國家權力との關係を強くもっている。社會のあり方が國家のあり方を決定すると同時に、國家權力のあり様が又社會を規定する面をもっている。國家論・政治史論と合せて社會史論を展開しなければ眞の中國古代史像は描ききれないであろう。そのために、今後とも著者との交流・相互批判・共同研究を進めて行くことを願っている。

一九八六年九月 東京 青木書店  
A5版 三四三頁 六五〇〇圓

田仲一成著

## 中國の宗族と演劇

林 和 生

本書はさきに『中國祭祀演劇研究』の大著を發表された田仲一成氏が、その後一九八一年から一九八四年にかけて、香港・シンガポール・ベナンで行われた前後十七回、延べ滞在期間十一カ月におよぶ精緻な現地調査の成果をまとめられたものである。前著が中國の祭祀演劇の體系を社會組織全般の立場から考察されたのに對して、本書は祭祀演劇を組成する單位として宗族の立場から宗族の色彩が現れてくる仕組みを、祭祀演劇の發生段階である市場地演劇から收斂終着段階である宗族内神演劇まで、順を追って検討されている。本書が刊行されたあとも、續々と中國の演劇に關する優れた論文を發表されており、この分野に關しては氏の獨り舞臺といえよう。

近年、中國の村落社會の構造に對する關心がとみに高まっているが、現地調査に基づいた資料が清末から民國代にかけて行われた實態調査に限定されている現状において、本書を含めた氏の精力的な現地調査に基づいた研究は、歴史研究の分野のみならず社會學・文化人類學・地理學等からの村落社會研究にとっても多くの重要な示唆を與えてくれる。

以下、一千一百頁を越える大冊であるが、若干の乏しい私見を交えながら、各章の内容を紹介することにしたい。まず、本書の章別構成を目次に従って擧げておこう。